

皆同じ人間

神崎中学校2年 加藤 愛理

私は小学校三年生の時に大きな病気になり、その後遺症で車いす生活になりました。いわゆる障害者になったのです。それまでとは違う立場になった事で気づいた事があります。私は今まで障害者が困っている時、見て見ぬふりをするのは違うと思っていました。しかし、ただ障害者だからといって過度に気をつかうのも差別の一步だと気づきました。理由は、二つあります。

一つ目が、私が特別支援学校から地元の小学校に戻った事です。この変化によって、勉強へのやる気が上がり成績も伸びました。普通なら、障害者に慣れている専門の先生と一対一で勉強することが分かりやすいと思われるがちですが、私は逆でした。周りのみんなが頑張っている姿をみて、私も頑張ろうと思えたのです。また、特別支援学校ではテストがなく、ただ教科書を読むだけなので自分のペースで進められました。ところが地元の小学校ではみんなが堂々と発表している姿をみて、負けていけないと必死に頑張っていました。障害のある私は、確かにみんなと同じ勉強時間を取る事や、塾へ通えるわけではありませんが、だからこそ授業の内容をその時に理解しなくてはと必死になりました。皆についていこうと努力していた結果、勉強量がみんなよりも二倍になっていました。その甲斐あって今は成績も常に上位にいます。だからこそ、私は障害者といって特別支援学校しか道がないとか、順位をつけるのは可哀想と言ってやめるのは違うと思います。

二つ目の理由は、私には病気になった後も変わらずに接してくれる友達があります。彼女は昔から私と仲良くしてくれた友達で、私はこの病気になったために、彼女と遊べなくなるのではないかと心配していましたが、彼女は変わらずに私と一緒に遊んでくれました。彼女は以前の私と、遊んでいた遊びを今ならどうやって遊べるか考えてくれたり、私が困っているとすぐに気づいてくれたりします。それを自然にしてくれます。だから私は彼女と気兼ねなく付き合えるのです。彼女の優しさに本当に嬉しく思いました。彼女は病気や障害を気にせず接してくれる存在であり、その事が私にとって大きな支えとなっています。

障害者であることは確かに困難な事ですがそれに対して可哀想とやみくもに言うのは違うのではないのでしょうか。障害者が抱える問題に目を向け、その人に合わせて手助けをする事こそが大切なのです。障害者だからといった特別扱いや、過剰な気遣いをする事は差別の一步と私は感じています。

最後の理由はある出かけた日のことです。私の車いすのタイヤが段差に挟まって動けなくなりました。付き添っていた介助者も女性だった為に、持ち上げる事も出来ませんでした。そんな時、一人のおじいさんが、「持ち上げましょうか。」と声をかけてくれました。私は心から「ありがとうございます。」と言いました。そのおじいさんとは面識がありませんでしたが、その方の優しさに本当に助けられたと感じました。この出来事から私は、改めて見て見ぬふりをせずに助け合う事の大切さを学びました。障害者かどうかに関わらず、

誰か困っている人がいたら声をかけて、助けるような社会になればいいなと思うのです。

私達は皆、同じ人間です。特別扱いをするのではなく、互いに支え合い、声をかけあう社会を築けるのではないのでしょうか。

このことを書いていて、私はたくさんの人に恵まれているなど実感しています。その中で私の考え方を覚えてくれた看護師さんがありました。その人は初めて私と対等に接してくれました。それまでは、私の事をどことなく可哀想と気を遣う人ばかりでした。しかし、彼女は普通に私と接してくれました。その普通が心地よかったです。なぜ、彼女は私に普通に接する事ができるのか、彼女の話を聞いて知る事が出来ました。彼女も小さい頃から難病を抱え入院を繰り返したそうです。だから患者の気持ちが変わると説明してくれました。彼女も私と似た経験をしていたのです。その経験から私に壁を感じさせない気遣いができたのです。私はそれを聞いてこの経験を何かに活かせないかなと思うようになりました。私も彼女と同じように、突然病気になる人達や、障害のある人に寄り添い、気になった人達や、障害のある人に寄り添い、その人達が何をしたいのか声を聞いていきたいです。私だからこそ聞ける声もあると思っています。そして、それを社会に広げていけるようにしたいです。

また、障害者としての経験を通じて、周りの人々が私を支えてくれていることにも感謝しています。障害に関係ある人もない人も、障害者も健常者も同じ人間です。ただほんのちよつと皆さんと出来る事が少ないだけ。これを知ってもらいたいです。